

談 話 室

「談話室」の開設に当って

編 集 委 員 会

「一般教育研究」は、第四号を数えるまでになりました。「一般教育研究」には、ご承知の通り、一般教育部内はもちろん、部外の方からのご投稿をいただいて、毎号、労作が掲載されております。そして香川大学内外にその反響も聞かれるまでになりました。ひとえに教官各位のご協力とご支援の賜物であります。これら好意あふれるご意見、ご批判を敏速にご紹介し、また気軽に短かい論説風の文章を、多数掲載することができるよう、新たに「談話室」という欄を設けることにいたしました。「一般教育研究」がそういう場を求めるまでに発展しましたことは、まことによろこばしいことであります。

「談話室」は一般教育ないし一般教育部に関わりのあるご意見なら自由に発表していただけます。原稿の長さは、気楽に各自の問題意識を発表できる場という趣旨から、原稿用紙数枚程度とします。なお、原稿は氏名を明記することをたてまえとしますが、論争的な問題提起も活発に行えるよう、ペンネームでもさしつかえありません。

以上のような趣旨と目的をご了解いただき、教官各位の一層広範なご協力、ご支援をお願いいたします。

「一般教育研究」誌合評会雑記

山 田 勇

「一般教育研究」誌も第4号が出される運びとなったが、過去二年に渡って編集活動に携わってきた一員として、先ずこのことを率直に喜びたい。本誌「一般教育研究」はその編集要項にある通り「一般教育に関する諸問題を論じ、本学に於ける一般教育のあり方、あるいは教育内容、方法等の改善に資することを目的と、しているの

(1) あるが、実際に原稿を戴いてみた限りでは原稿依頼の段階で斯様な本誌の方針が投稿者に充分徹底していないと思われるケースも、間々散見された。本誌は他大学にも余り類例をみないものである為、各号が試行錯誤の連続であり、そのことが又、一般教育活動に課せられた使命の重さを痛感される所以ともなっている。しかし号を重ねる

に従って、こういった懸念が払拭されつつあることは一応の評価に値するものと思われる。

私は研究室委員として、原稿の依頼と共に、本誌の発行直後に、本誌に投げかけられた一般教育の理念とその実情とのギャップに関する問題点をより深められた形で認識するため、一般教育研究会活動の一環として設けられた本誌合評会の司会という役を勤めることになった。合評会は過去三回いずれも本誌発行を機会に行なわれてきたが、私は第二号及び第三号について司会の機会を与えられた。投稿される原稿の内容は非常に多岐に渡っていたので、上記各号を通読するだけでも可成努力が必要であったが、それにも増して投稿教官各位が、何らかの意味で御自分の研究分野を踏まえた上で一般教育へのなみなみならぬ配慮と洞察を看取出来たことは大変意義深いことであった。

合評会で取り上げられた諸論文のうち、広く大学に於ける教育方法の改善をテーマにされた宇川教官の場合、カラーVTRを⁽²⁾活用されての説明がなされたが、改めて深刻なマスプロ教育の実体をまのあたりにして、語学教師としては、この実情に憂慮せざるを得なかった。一般教育、特に我々が担わされている意味での一般教育を巡る責任体制の問題を論述された堀地教官の論文⁽³⁾は、一般教育担当部局と各学部とくにリベ

ラリアーツ系学部とが⁽⁴⁾どの様に密接かつ有機的な関係を保っていかねばならないかを明確に指摘したものであった。更に一般教育の抱える問題点の他の側面についてみれば、山内教官の場合共同研究科目に就いて、第三号ではその総括が示されている。一般教育という制度がけっして固定した制度でない以上、こうした新しい試みは瞳目に値し、我々の耳目を集めるところであるが、それなりに運営面での困難を克服して行くプロセスこそ緊要であると思われる。会場ではこの点について質疑と意見の交換が活発になされたことを付記しておきたい。尚斯様な論議こそ今後の一般教育活動発展のエネルギーとなりうることを司会者として実感出来たことも幸いなことであった。

大学における美術教育のあり方に就いて述べられた⁽⁷⁾神田教官、或いは明治40年代の石川啄木についての⁽⁸⁾桂教官の報告は、夫々、専門の立場から、専門と一般教育の関連のあり方を提示したものと云ってよい。

司会者としては、先にも述べた如く、各方面の潤沢な知識を必要とする諸論文を読みこなすだけで相当労力を要したが、関係各位の御協力を得て、曲がりなりにもつつがなく合評会を運営出来たことに安堵の感を覚える次第である。

末筆ながら運営の任に当たる者として、合評会に報告を依頼し、諸般の事情により

御報告戴けなかった方々に、この紙面をお借りして一言陳謝の意を表する次第である。

- (1) 「一般教育研究」の発行に関する要項2、目的 一般教育研究 第二号 1972年4月
- (2) 宇川勝美 大学の大衆化と教育方法の改革 一般教育研究 第二号 1972年4月
- (3) 堀地武 後期一般教育科目について一くさび型カリキュラムおよび一般教育責任体制との関連一 一般教育研究 第三号 1973年1月

- (4) 上掲書P.59
- (5) 山内重幸 46年度共同研究科目「現代思想と学生」についての総括 一般教育研究 第三号 1973年1月
- (6) 山内論文は創刊号よりの掲載である。
山内重幸 運動としての一般教育の基本点をどう抑えるか。一附「共同研究科目」中間総括一 一般教育研究 創刊号 1971年10月
- (7) 神田融 大学の美術教育一般教育研究 第二号 1972年4月
- (8) 桂孝二 明治44年1月の石川啄木 一般教育研究 第二号 1972年4月

「共同研究科目」について

瀧 川 一 幸

一般教育研究に談話室と云う欄ができるそうである。その欄の寄稿文を研究室委員の人から依頼された。思うに、私は強いて何か云ってみたい事を持っている訳ではない。それでその人にその旨を云ったのであるが、第三号の研究討論会に於ける発言でも良いから是非にとの事でこの文を書く次第である。

二月二十三日第五回一般教育研究会が開かれたが、その時のテーマは第三号一般教育研究についての論議が主で寄稿者を中心に討論があった。その中でいつも熱心に様

々な協力をして下さっている山内先生の『46年度共同研究科目「現代思想と学生」についての総括』と云う論文に対する討論があり、私もいくらかそれについて発言をしたのでそれについて少し述べてみたい。

46年度より、一般教育の中で、共同研究科目、総合科目、プロゼミと云った従来ない全く新しい形態を持つ科目がかなりの数で開講された。そしてこれらの科目の開講の理由は、主として学生の従来の<講義形式>の科目に対する不満に端を発していた事は周知の事である。